歴史を歩く29

『戦国時代の群像 ～第十四話　兼続の死～』

永禄4年（1561年）の廻城（霧島市福山）を巡る肝付氏と島津氏との戦の後、豊州島津家救援のため飫肥に滞在していた島津忠平（後の島津義弘）は、島津貴久によって鹿児島に呼び戻されていた。

これを機に日向の伊東義祐は、永禄5年（1562年）1月22日に再び飫肥への攻撃を開始する。同年2月10日には、島津忠親の飫肥本城と酒谷城（日南市）を攻め落とし、これに乗じて肝付兼続も忠親を攻めた。伊東氏と肝付氏に挟み撃ちにあった島津忠親は、ついに両氏に和解を求めた。

島津忠親は2月28日に飫肥を去って櫛間に隠居し、飫肥の地は伊東義祐に譲ることにした。肝付兼続に対しても、救仁院（現在の志布志）、安楽、松山城を譲った。5月28日に兼続は志布志の地を隠居所と定め、多数の臣下を連れて移ってきた。この時大崎地頭 伊集院竹友も志布志地頭として移っている。

しかしながら、櫛間に隠居していたはずの島津忠親は9月17日、飫肥本城が守兵交代で守備が手薄になっている時を狙って飫肥を攻め、奪回に成功した。ついで翌年酒谷城も奪回した。

永禄7年（1564年）1月20日、伊東義祐は北方から、兼続は南から飫肥を挟撃した。7月18日、兼続は福島（串間市）に侵入し、忠親の軍と桂原で激戦となった。忠親方は部将 新納忠衡以下多数の兵が討ち取られた。兼続方も22名の戦死者を出したが、この戦いで忠親の勢いも衰え、翌8年には義祐の飫肥包囲態勢が整った。

ところが今度は、永禄9年（1566年）5月18日、都城の北郷時久が南下し、兼続の松山城を攻めてきた。北郷時久は島津忠親の実の子である。兼続はこの時久の動きに対応せざるを得なくなった。現在の曽於市大隅町と志布志市松山町境にある大田尾で時久を迎え撃ち、両軍の会戦となった。兼続はさらに6月16日に北郷時久の南下に備え、岩川を攻めた。兼続方は26名を失ったものの、時久方に勝利した。

兼続が北郷時久の攻撃に対応している間、島津忠親は福島の兵を飫肥に送り、伊東氏に備えた。また7月2日、北郷時久も飫肥に向かい、忠親を援助した。しかし、福島が手薄になっているところに、肝付兼続の子兼良が福島に進軍したため、時久は兵を福島に向け、肝付勢と戦った。

このように、飫肥を中心として日向・大隅東部で攻防が繰り返される中、肝付兼続が志布志の地で急逝した。永禄9年（1566年）11月15日のことである。享年56才であった。

―11月14日の夜、根占方面から攻め入った島津軍が地元民を買収し、高山本城を襲撃、堅固な城であった高山本城は落城した。城主であり、兼続の子である肝付良兼は幼子である伊勢童丸を乳母に背負わせ、良兼一族は闇にまぎれて志布志へと逃げたが、池之原で島津の伏兵に囲まれ一族離れ離れとなった。良兼の妻は岩弘街道で殺害され、伊勢童丸と乳母は串良の岡崎で殺された。そして良兼も別府原で従者とともに悲惨な最期をとげた。

廻城に出陣していた兼続は高山の急変に驚き、急いで志布志に帰ってきたが、息子らの悲報を聞き、悲しみのまま11月15日、大慈寺下の浜浦で自害した―

『串良旧領擾乱記』や、『肝付落城伝記』には兼続の死に至るまでのいきさつを、このように悲劇的な最後で伝えている。

しかし良兼は、兼続の死後も島津氏と交戦し、元亀2年（1571年）に亡くなっている記録もある。また高山城の落城も天正元年（1573年）という記録もあるので、高山城落城と良兼一族の殺害、そして兼続の自殺というのは史実と異なる可能性が高い。

しかしいずれにせよ、天文2年（1523年）に家督を継いで以来、肝付氏最大の勢力を大隅半島に広げてきた肝付兼続の突然の死は、この後島津氏との雌雄を決する局面において、肝付家の運命に大きな影を落とすことになる。

（大崎町教育委員会　内村憲和）

▲『肝付兼続の墓（志布志支所近く児童公園内）』